容していたかの事情は明らかでないが、恵日寺にも、高田のお田植祭と同じく、お田植祭の行なわれた証跡があるから、磐梯山に山の神を祭り、これを季節により下して、田の神として祭り、会津地方の農をもとにする人々の信仰を集めていたかと思う。

この支配系統はよくわからないが、康保元年（九六四）北会津村でも石原村に薬師寺を建立したという伝承が残っており（石原部落の項に詳述）、真渡には永承六年（一〇五一）前九年の役に鎌倉権五郎と弥三郎が落ちてきたと伝え（真渡の項に詳述）、同部落にある輝井の宮は、文治五年（一一八九）当時藤原泰衡に誅された輝井某を祭ったものともいっている。塔寺八幡宮の天喜五年（一〇九七）の記録には、既に荒田村の名がみえるから扇状地末端の清水湧出地帯は、古墳時代より、相当な開拓が行なわれていたことを想起することができる。

大宝元年（七〇一）相津を会津と改め、会津郡の名も既にみえ、延長中（九二三～三〇）には会津郡より大沼郡が分れて独立している。北会津村は最初会津郡に含まれ、延長中より徳川期の中頃までも大沼郡に属していることになる。

漸く北会津村の開発の黎明が基礎的に固まってきたのは、この頃かと思われる。

# 第二章　芦名来封より徳川末までの治政

## 一、館の構築時代

1　新編会津風土記書上げの城跡と館跡　文化六年（一八〇九）に成った風土記には、現在の北会津村内に一三の城や館の書上げがある。その一つ下荒井のものだけは城となっている。富田氏とあるだけであるが、葦名の